

いさゝか小錢を與へしが、そは隣りの兒にて、小作人の不平甚しく、かくの始末とおぼろ氣ながらわかり候ものから、この日早速相當の賄賂を持行しに、俄に待遇かはりて、何處で繪をかきも差支なしと申、其上茶よ芋よと引とめられて、いろ／＼の雜談にかくは日の暮るゝをもしらざりしとの事に御座候。

幾日か朝夕を共にせし友にも宿にも分れて、今朝小丹波出發、通り／＼て万年橋へ參り爰に一枚の寫生を致し、さて時計を見れば恰も午後二時、青梅の終列車には餘程ひま有之候まゝ、爰茶店の腰掛に鉛筆走らせ申候、詳しきとは歸京の後ゆる／＼可申上候（十一月十日澤井にて）

## 六

徒然のあまり再びつたなき筆を染め申候。さて澤井にて草鞋をあらため、時早ければ牛の歩みのそれならねど、あたりの景色をゆる／＼眺めつゝ、兎角して青梅に着致候處下り列車の延着にて甲武線との接續覺束なければ、切符は立川迄との事、立川にはよき宿屋もあらぬよしにつき不得止當地一泊と定め、坂上本店と申に參り候。此家當驛第一の旅店、萬事行届き居快よく覺え候。こよひの夢果して如何。後便又々可申上候（十一月十日青梅にて）

## 七

昨夜恙なく歸京致候。諸方よりの信書、書籍雜誌の類、机の上にところせき迄重なり居、この四五日の忙しき思ひやられ申候。誰も同様のことに候半が、旅行と申もの、出發のおりと歸京の

時は尤も樂しきものと存候。未見の山水、行路の愉快など心に描きて其日の早や來れかしと相待申候は、興もつき目的も達し、なつかしき吾家、親しき友の顔、さては手馴れし道具の類迄も俄に慕はしくなりて、歸りを急ぐ心と其樂しきは同じかるべきかと存候。さて青梅にてはがき差上候後、樂しき夢に入らんと存候處、事も仇や、家大なれば人多く、女中共の足音もわるく耳に入りてうるさく、久し振にて二枚重ねし布團の上に横たはりしはよかりしが、時ならぬ夜半隣室俄に客ありて、あたり憚からぬ大聲に女中共を追ひ廻しなど致し、騒がしく夢なりがたく、氷川さては小丹波あたりの山家の、物靜なるこそ却て心安かりしをと今更なつかしみ申候。

明れば十一月十一日、八時過の流車にて立川に着、日野の河原に十六切二枚を得、高き楢に夕陽の名残をとむる頃大久保に着、五氏を訪れて共に四谷門外三河やに會食、一盞の美酒に目出度此行を終り申候。工氏は澤井あたりに猶四五日滞留のよし、定めて立派なる作あるべきかと存候（十一月十二日東京にて）

『藝術の愛に心を同しうしたるもの、集りてこの草子を編、これより藝苑の樹林に逍遙せむとす。製作に、論議に、皆必らずしも同一の道を辿らずといへども、思はかのそこしもなき、靈妙の高音を慕はむ』こは上田島崎馬場等の、平素美術に同情深き人々の手によつて新に生れし雜誌『藝苑』冒頭の言なりとす、冀くはたゞに文學の上のみならず、美術の方面にも時折論議を試みられんとを。